

言語文化学科

中国語中国文学コース

Chinese Linguistics and Literature

言語文化学科

国語国文学コース

Japanese Language and Literature

中国語中国文学コースについて

中国語中国文学コースでは、中国語学、中国文学および中国文化を研究対象としています。研究対象とする「中国」は、中国大陸のみならず、台湾、香港、東南アジアを含む華人世界など、広く中華圏を指します。語学分野は、古代漢語から現代漢語に至る中国語の歴史的な展開を文法、音韻、文字などの側面から多角的に研究しています。文学分野では、作者の境遇や当時の思潮を視野に入れ、原典資料を丹念に読み解きます。文化論の分野では、映画などの表象芸術を中心とした研究を行なっています。

ネイティブ教員による授業も行なわれ、留学生も多数在籍しており、中国文化を身近に感じながら勉強することが出来ます。

国語国文学コースについて

国語国文学コースでは、あらゆる時代の日本の言語と文学作品を研究対象としています。授業ではその中から具体的なテーマが取り上げられますが、そこで学ぶのは「知識」よりはむしろ対象を実証的に分析する「方法」です。演習の授業では、その「方法」を学んで、未解決の諸問題に学生自身が挑むこととなります。努力すれば学部生でもかなり高いレベルの研究ができるのが、母語を研究対象とする本コースの強みでしょう。資料にもとづく実証的な調査は根気が必要ですが、新たな発見があったときの喜びは格別です。たとえて言うなら、ひらめきに優れた天才探偵タイプより、むしろ愚直に捜査を積み重ねるたたき上げ刑事タイプの方が、本コースに向いているかもしれません。

先生の研究

私の専門は江戸時代の文学・演劇で、その中でも主に人形浄瑠璃（文楽）について研究しています。人形浄瑠璃は、戯曲としても優れた大人のための人形劇で、世界でも類を見ないユニークな様式を備えています。一作品を通して上演すると8時間ほどかかるというその長さの点でも異例のものでしょう。人形浄瑠璃という芸能、そしてその個々の作品は、一体どのような時代背景のもとに成立したのか、そして現在の文楽に至るまでどのように変化してきたのか、そうしたことが私の主な研究テーマです。大阪で初演された作品をレポートにして諸国を巡業してまわった淡路の人形座（江戸時代には20ぐらいの座がありました）についても、特に興味を持って研究を進めています。



教授 久堀 裕朗 先生

○コースでの学び
今受講している授業では、中世の物語の解釈や万葉集を用いた日本語の変遷などを学んでいます。自分で文献を調べて授業内で発表することもあり、前は大変だなあ、と思うことが多かったのですが、最近ではぴったりの文献を見つかることに楽しさを感じられるようになりました。

○コースの雰囲気・PR
学生同士の上下のつながりが強いですね。特に、院生の方とも交流があることが特徴で、私も文献の探し方で困っていたところを助けてもらったことがありました。

先生の研究



教授 張 新民 先生

中国語圏の映画の歴史を研究しています。19世紀末、中国に伝来した映画は、2012年、中国が日本を追い抜きアメリカ・カナダに次ぐ世界第2の映画市場になりました。これまで特に力を入れて研究を進めてきたのは、伝来期の上海映画、1930年代における国民政府の映画文化政策、芸術至上・娯楽中心を主張する「軟性映画」の理論的研究そして、1980年代に登場し世界が矚目した中国第五世代映画監督のうち張芸謀による作品の研究です。最近では、日中戦争期（1931～1945）における日本占領地域であった上海、中国東北地区、台湾、華北地域での映画製作や上映状況および映画政策について研究しています。



3回生 村井 彩希 さん

○コースでの学び
ある授業では、中国四大名著のひとつ『紅樓夢』や、上海の有名な作家である張愛玲などの作品に触れ、中国語を日本語に訳し読み深めています。また、中国の映画、中国語の文法や語彙について詳しく学ぶ授業などもあります。

○コースの雰囲気・PR
少人数の授業形式だからこそ、自らの意見を述べる機会がたくさん与えられます。また手厚い指導が受けられるのも魅力の1つです。中国人の院生や留学生が周囲にいる環境で、日本にいながら中国語を使う機会もたくさんあります。留学で得た知識や経験を活用できるコースです。

梶尾さんへのインタビュー



3回生 梶尾 優月 さん

○コースを選んだきっかけ
私は高校生のときから現代文と古文が好きで、授業で作品、たとえば夏目漱石の「こころ」などを読んで、それらを解釈することにおもしろさを感じていました。そのような作品の解釈がしたくて、このコースを選びました。

○コースでの学び
今受講している授業では、中世の物語の解釈や万葉集を用いた日本語の変遷などを学んでいます。自分で文献を調べて授業内で発表することもあり、前は大変だなあ、と思うことが多かったのですが、最近ではぴったりの文献を見つかることに楽しさを感じられるようになりました。

村井さんへのインタビュー

○コースを選んだきっかけ
1回生の夏に2週間華東師範大学に短期留学しました。さらに、2回生のときに上海大学に1年留学することを決意し、そこで学んだ経験を活かすことができるコースに進みたいと考えました。その後、中国語中国文学コースの先輩と知り合い、話を聞くうちに興味を持ったことこのコースを選択した理由の1つです。

※2019年度時点 教員紹介

岩本 真理 教授 Mari Iwamoto
近世から現代にいたる中国の語彙・語法の変遷。唐話資料にみえる近世中国語の日本における定着と変容。
『南山俗語考』翻字と索引（中国書店、2017）

大岩本 幸次 准教授 Koji Oiawamoto
中国語音韻史、中国古代理字書史
『金代字書の研究』（東北大学出版会、2007）

張 新民 教授 Shinmin Cho
現代中国文化論及び映画研究
共著『中国映画のみかた』（大修館、2010）



卒論タイトル例

- ◆史鉄生と地壇—「我与地壇」を中心として—
- ◆大阪で見られる多言語表示—中国語・観光客を中心として—
- ◆台湾出兵に関する考察

卒論タイトル例

- ◆女性的言葉づかいについて—「わ・こと・の・もの」の用法を例に—
- ◆『蜻蛉日記』下巻の春の情景—引歌の検討を通して
- ◆『絵本増補玉藻前曦袂』の作劇—原作・読本からの改変を中心として—

※2019年度時点 教員紹介

丹羽 哲也 教授 Tetsuya Niwa
日本語の意味と文法。普段使っている言葉がどのような仕組みでできており、それが過去から現代までいかに変化してきたかという研究。
『日本語の題目文』（和泉書院、2006）

小林 直樹 教授 Naoki Kobayashi
中世の説話伝承文学。とりわけ現在は、通世僧の文学世界を中心に研究を進めている。
『中世説話集とその基盤』（和泉書院、2004）

久堀 裕朗 教授 Hiroaki Kubori
近世文学、おもに人形浄瑠璃史の研究。
共編著『上方文化講座 義経千本桜』（和泉書院、2013）

奥野 久美子 准教授 Kumiko Okuno
芥川龍之介など大正時代の小説。特に大衆演芸からの影響について。
『芥川作品の方法』（和泉書院、2009）

山本 真由子 准教授 Mayuko Yamamoto
中古文学、おもに漢文学・和歌の研究。
『源道済の詠紅葉蘆花の和歌と序をめぐって』『国語国文』86巻4号（2017）

中国語中国文学コースにとって「物語」とは？

2019年6月11日から7月15日にかけて、神戸、大阪、奈良で「中国アニメ・漫画の日本ツアール」水墨の中から来る「巡回展が行なわれました。今回の展覧会には130部余りのオリジナルアニメ・漫画作品が展示されました。その中で最も注目を集めた作品は、「日本漫画の神」の手塚治虫氏が直筆した作品「孫悟空とアトム」です。イベントのメインポスターにもなっており、映画フィルムをリボンのように飾りつけ、見つめ合いながら肩を組んだ孫悟空とアトムは、40年前に手塚氏が上海美術映画製作所にプレゼントしたものだそうです。手塚氏が手掛けた名作「鉄腕アトム」は、中国でテレビ放送された初のアニメシリーズです。手塚氏は「飛んだり戦えるアトムの原型は孫悟空だ」と話したことがあるように、また「孫悟空とアトム」の作品には手塚氏の自筆「日中アニメ界の永遠の友好を！」と書き記されています。孫悟空とアトムの物語は日中友好の架け橋といえます。（文・張先生）



国語国文学コースにとって「物語」とは？

「物語」という言葉は、もともと「ものがたりす」（話をする）という語から起こったものです。さかのぼると単に文字で書かれたストーリーを表すのではなく、声に出して物語られるものという意味合いを含んでいました。源氏物語も最初は宮中の女房が姫君に語り聞かせるような形で受容されていました（玉上琢彌著『源氏物語音読論』。「音読」というと、我々現代人は「音読」をあまりしませんが、江戸時代までの読書は「黙読」ではなく「音読」が主体でした（前田愛著『近代読者の成立』）。また「物語」にメロディーをつけて語り聞かせる芸能を語り物と言いますが、かつて一世を風靡した浄瑠璃や浪曲などの語り物も、今では一部の人だけに愛好されるものになっていきます。このように考えると、現代人は耳から「物語」を受容することが昔の人に比べて圧倒的に少なくなっているようです。その是非はともかく、この変化には留意する必要があると思います。（文・久堀先生）

